

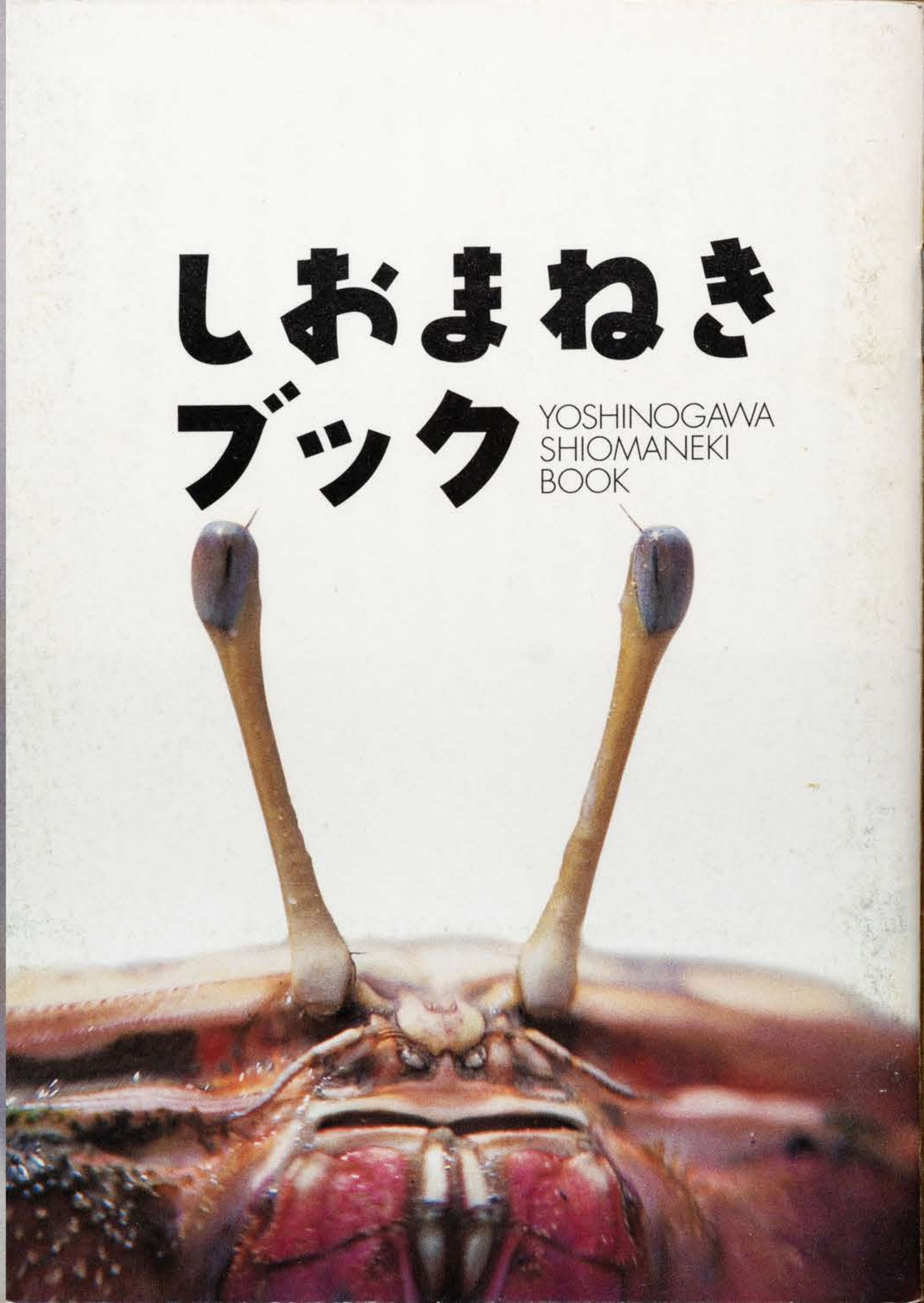


しおまねき
ブック

YOSHINOOGAWA
SHIOMANEKI
BOOK

発行：とくしま自然観察の会
頒価：500円

このガイドブックの刊行にあたっては、
WWF-Japanの
1997年度助成金および
「しおまねきコンサート」(1997.6.13)の
収益金を出版費の一部に
充当いたしました。



しおまねき
ブック

YOSHINOOGAWA
SHIOMANEKI
BOOK

「しおまねきブック」 のための長い前書き

吉野川は徳島の自然・文化・産業にとって重要な役割を果たしてきました。吉野川が現在の徳島をつくったと言っても過言ではありません。徳島に暮らす私たちは吉野川から多大な恩恵を受けていますが、その恩恵は経済や文化に限られません。吉野川は、私たちの生活の原風景として心の中に存在しています。故郷として徳島を思い出すとき、そこには吉野川の姿が描かれてはいないでしょうか。

そんな私たちにとって身近な吉野川ですが、身近であればこそ見えない(見ていない)足元の部分があります。河口に広がる干潟は、まさに吉野川の足元です。川の終着点である干潟には上流から色々なものが流れ着きます。水が運んできた色々

なもの、徳島とそこに暮らす私たちの「美しさ」や「汚さ」を如実に映し出しています。また、河口干潟は、川が海に接するところです。愛媛・高知県境の石鎚山地瓶ヶ森を源にして徳島を流れてきた水が海という広い世界へと流れ出る場所です。川と海とが交わる干潟は、多種多様な生命の活動で活気に満ちています。もちろん私たち人間も多様な生きものの一つです。

私たちは吉野川とともに暮らし、吉野川で遊ぶ人として、吉野川河口干潟の魅力とありのままの姿を「しおまねきブック」に表したいと考えました。このハンドブックがみなさんの好奇心をくすぐり、足元の干潟に目を向け、カニの動きに注目し、野鳥の声に耳を澄まし、潮の香りを胸一杯に吸い込み、干潟について考える手助けになればいいな、と思います。





しおまねき ブック

YOSHINOAWA
SHIOMANEKI
BOOK

●目次

- 干潟の探検に出発しよう! 1
- 河口干潟って、どんなところ? 3
- シオマネキ徹底解剖 5
シオマネキについて/シオマネキの分布/カニのすみ分け
- 干潟はレストラン..... 9
- 真昼のダンス大会 11
カニたちのウェービング
シオマネキ/ハクセンシオマネキ/ヤマトオサガニ/コメツキガニ/チゴガニ
- 干潟の住宅事情 15
シオマネキの巣穴そうじ/コメツキガニ・シオマネキの蓋かぶせ行動
- 干潟のカニの仲間たち 19
オオユビアカベンケイ/ヤマトオサガニ/コメツキガニ/チゴガニ
ケフサイソガニ/アシハラガニ/フトヘナタリ/トビハゼ/ルイスハンミョウ
- 吉野川河口干潟へのメッセージ 24



干潟の探検に 出発しよう!



う岸に。そして、空に。空がこんなに広がったんだと、当たり前前のことに感心してしまいかも知れません。

も う一度深呼吸して、かすかな潮の香りを嗅いだあと、視線を足元に移してみよう。ちょうど干潮の時間だったら幸運です。潮が引いて川幅がぐっと狭くなり、泥と砂でできた干潟が姿を現しています。吉野川ならではの広い広い河口干潟です。

そ の干潟のうえを何かのごそごそと動いています。カサツ、カサツという

四

国一の大河、吉野川。その河口に架かる長い長い吉野川大橋。徳島駅から車でわずか10分のこの場所に吉野川河口干潟(住吉干潟)は広がっています。運動靴を長靴に履き替えて、帽子をかぶって、手に双眼鏡をもって、干潟の探検に出発しましょう。新しい出会いと発見が待っています。吉野川大橋の南側の堤防を下流に向けてどんどん進みましょう。やがて河川敷のグラウンドがとぎれると、川岸を縁取るヨシ原が目に見え込んできます。

こ

こで大きく深呼吸して、耳を澄ましてください。すると、堤防沿いを走る車の音が小さくなって、ヨシ原を駆け抜ける風の音や甲高い鳥の鳴き声が聞こえてきます。

視

線を遠くに向けてみましょう。ヨシ原から川の流れに。川面から向こう音も聞こえてきます。目をこらして見てください。太陽の光を浴びて、いろんな姿をしたカニたちが動き回っています。でも、もつとよく見ようとあわてて一歩近づくと、カニたちは一斉に巣穴にかくれてしまいました。足音をたてないように近づいて、ちよつと腰を下ろして、カニたちが出てくるのを静かに待ってみましょう。



河口干潟って どんなところ？



●干潟に群生するヨシ



に溶けて、あるものは水に浮かんで、またあるものは水に転がされるようにして上流から下流へと運ばれます。人の手によつて川に流されたものもあります。川の水はまるで貨物列車です。そして、水という貨物列車の荷物は流れの緩やかになった河口干潟や海でゆっくりと降ろされてゆきます。

海

の満ち潮も干潟にいろんなものを運んできます。河口干潟は川の水という列車と海の水という列車が交差す

吉

野川は河口から約一九八kmさかのぼった石槌山地瓶ヶ森を水源にしています。その一九八kmの旅の中で、水はあちらこちらにぶつかりながら、いろんなものを削り取ります。あるものは水

る駅です。そして、その駅には、たくさんのもものと、たくさん生き物が集まります。シギ、チドリなど一五〇種を超える鳥たち、トビハゼや魚の稚魚、ゴカイやアサリなど泥や砂の中にすむ生き物、顕微鏡でしか見ることでできない小さな生物、いろいろな姿をしたカニたち、シオマネキ…、そして、人。干潟は生命の活気にあふれています。

河

口干潟にはいろんなものが流れ着きます。人

の目にきれいに映るもの、汚く映るもの。シオマネキにとって役にたつもの、有害なもの。水は分けへだてなくいろんなものを運んできます。



●干潟に流れ着いたゴミ



シオマネキ 徹底解剖

キの登場です。吉野川の干潟でまず目に飛び込んでくるのがこのシオマネキです。

シ オマネキの特徴は、何と言っても片方だけが大きなはさみです。大きな方のはさみの長さは、甲羅の幅をゆうに超えています。でも、こんなに大きくて邪魔にはならないのでしょうか。

も うちよつと周りをよく見てください。左右のはさみが両方とも小さなシオマネキがいます。このかわいいはさみのもち主は雌のシオマネキです。

雄 の大きなはさみのようには目立ちませんが、雌の小さなはさみの先は真っ赤に染まって、まるでマニキュアを塗っているようです。普段は泥がついてよく見えませんが、甲羅の色も意外にきれいです。赤や肌色の下地に黒の絵の具で描いたような模様が見えます。模様の図柄は一匹一匹違うようです。

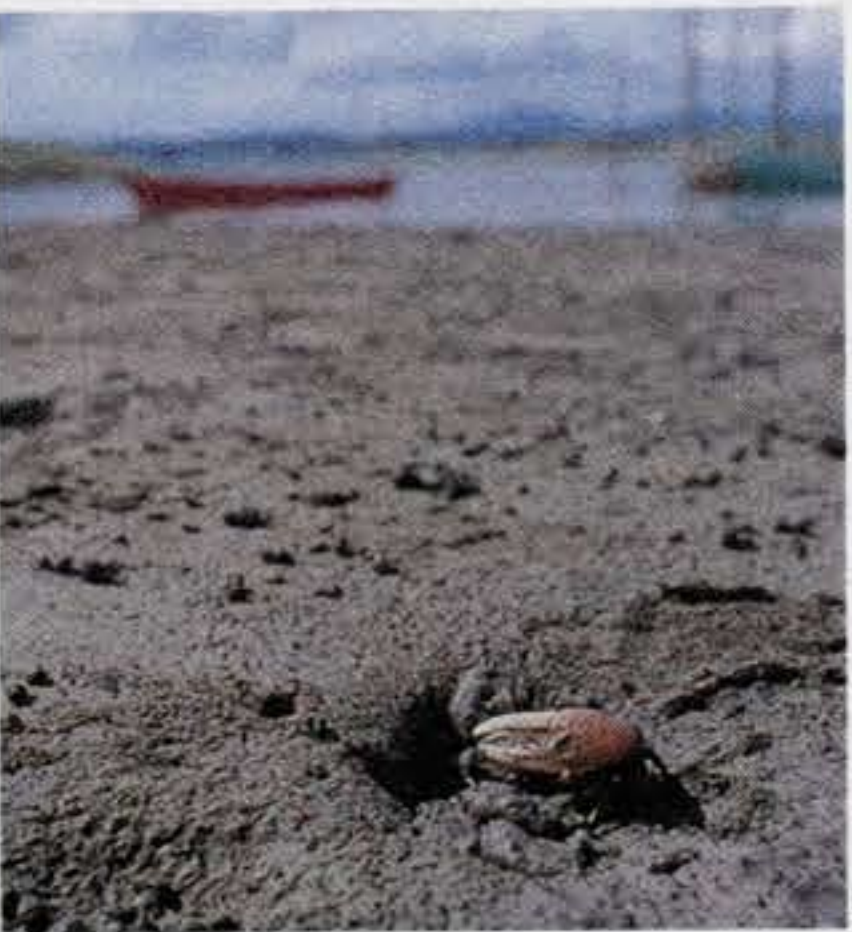
シオマネキについて

シ オマネキ(学名Uca arcuata)は河口や干潟に生息するスナガニ科のカニです。英語ではFiddler crab(バイオリン弾きのカニ)と呼ばれています。そう言われると、大きなはさみを手前に張り出した格好はバイオリンを抱えているように見えてきます。

右?左?大きなはさみはどっち?

シ オマネキの雄のはさみは片方が異常に大きく発達しています。ほとんどの生き物は左右対称な姿をしています

から、シオマネキの左右不釣り合いな格好はたいへん例外的と言えるでしょう。ところで、大きなはさみは左右どちらでしようか。シオマネキの仲間のハクセンシオマネキでは、右のはさみが大きな個体と左の大



きな個体がほぼ一対一だそうです。ところがヒメシオマネキでは、右の大きな個体の方が圧倒的に多いそうです。はたして吉野川のシオマネキはどうでしょうか?

雄の喧嘩の決まり手は「押し出し」

吉 野川の河口干潟にはシオマネキが群れています。これだけたくさん集まると、あちこちで雄同士の小競り合いが起こります。そんなときに、あの大きなはさみでお互いにはさみあったら…、と悲惨な結果を想像してしまいますが、心配はご無用です。雄は大きなはさみを地面と水平に持ち上げて、はさみの外側で相手を押します。決まり手は相撲の「押し出し」です。私たちが近づいたときも、大きなはさみを振り上げて威嚇はしますが、あまりはさもうとはしません。ちょっと見かけ倒しかな?」



●日本におけるシオマネキの分布と現状

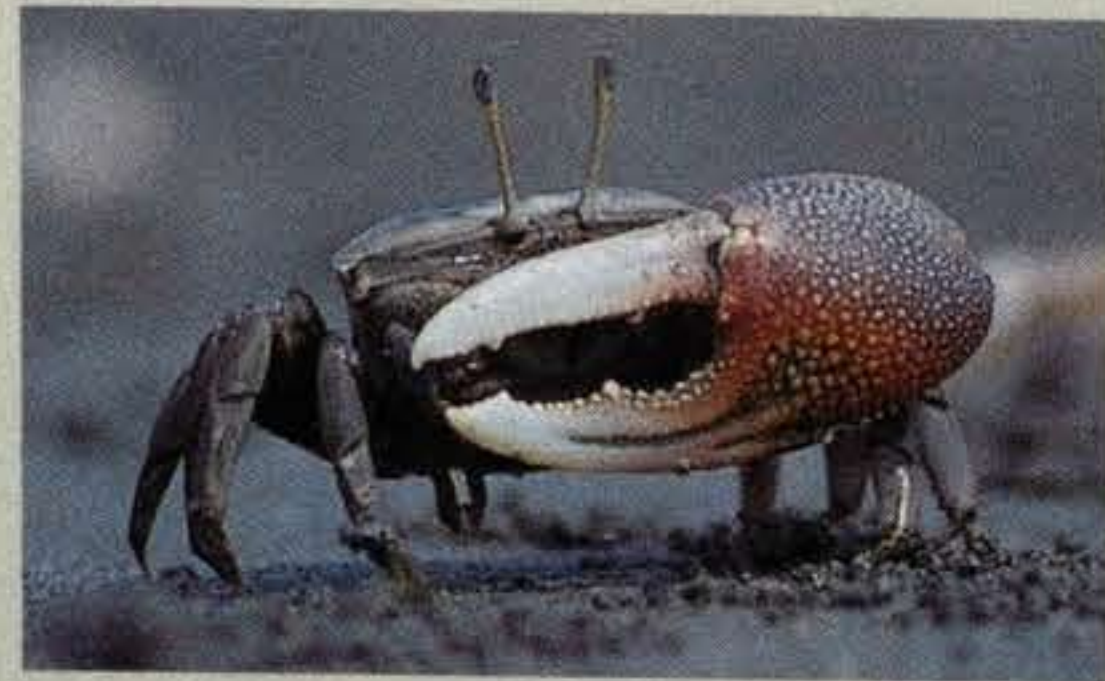
●健在 ★絶滅・絶滅寸前・危険

●和田恵次らによるWWF-Japanサイエンスレポート(1996)

吉 野川の河口干潟では、ごく普通に見られるシオマネキですが、日本全国どこの川でも見ることが出来るわけではありません。シオマネキは環境庁編(一九九一)「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)」で希少種に指定されています。現在、まとまった個体群が観察できるのは、吉野川以外では、有明海沿岸と宮崎県本城川河口ぐらいです。シオマネキにとって吉野川河口干潟は残された楽園と言えそうです。



●吉野川河口周辺の干潟



シオマネキはどこの川でも見られるのでしょうか?

上 の図は吉野川におけるシオマネキ(丸●)とハクセンシオマネキ(三角▲)の分布を示しています(井口ほか一九九七)。シオマネキは河口から約一〇・五kmさかのぼった名田橋付近でも確認されていますが、河口付近の汽水域(淡水と海水が混じるところ)に多く分布しています。シオマネキが生息する場所は、ヨシ原の分布や土の質(泥質)と関係しているようです。

江 戸時代の「阿淡産志」という本にシオマネキの博物画が載っていますので、シオマネキは昔から徳島に生息していたようです。「パンダクラブ徳島」らの調査(一九九四―一九九六)では、シオマネキは吉野川のほか園瀬川、勝浦川、那賀川の河口でも見つかっています。

干潟は レストラシ



●干潟のランチタイム

干 潮の時間、水が引いて干潟が現れると、カニたちのランチタイムが始まります。あちらから、こちらから食事のために、カニたちが湧き出てきます。

シ オマネキの雄は小さなはさみ一本で餌を口に運びます。雌のシオマネキは両方の小さなはさみを使います。雌の方が餌をたくさん食べられそうです。

**干潟のカニは
何を食べているのでしょうか**

カ この仲間の多くは雑食性です。干潟のカニたちも干潟の砂や泥に含まれる有機物や珪藻類、泥の上やヨシの根元に付着した藻類、死んだ魚貝類の

肉など、いろんなものを食べています。さしずめ「干潟の掃除屋」と言ったところでしょうか。

カニが干潟を浄化する？

シ オマネキやコメツキガニなどスナガ二科のカニは、口の中にブラシのような毛をもっていて、それを使って砂や泥の中の有機物の破片、バクテリア、原生動物、藻類（珪藻など）をこしとって食べています。つまり、カニたちは干潟を浄化する役割を担っています。

はさみと餌の関係は

カ この仲間は全部で五対の脚をもっていますが、先端の一对ははさみ脚と呼ばれ、人の手のように様々な目的に使われます（残りの四対の歩脚と呼ばれます）。はさみの大きさや形

はカニの習性や食性に適応しています。例えば、チゴガニやコメツキガニのはさみは閉じた形がスプーン状で、泥や砂を口に運びやすくなっています。一方、アシハラガニのペンチのようなはさみは、餌をつまんだり、ちぎったりするのに適しています。



●コメツキガニの砂団子



●ペンチのようなアシハラガニのはさみ

真昼のダンス大会

初 夏の太陽の日射しがさんさんと注がれるころ、干潟ではカニたちのダンス大会が始まります。少しの間、カニたちの演舞を鑑賞してみましよう。

シ オマネキは「潮招き」。雄のダンスは大きなはさみを体の前の方から上にあげて振り下ろします。この動きが、まるで満ち潮を招いているように見えた



▲シオマネキのウェービング

ことから、シオマネキという名前がつきました。シオマネキのゆつたりとしたはさみの上げ下ろしは、能役者の舞いを思い出させます。

た くさんの小さな白い扇が干潟の砂の上でゆらゆらと揺れます。白い扇の正体はハクセンシオマネキ（「白扇」シオマネキ）の雄の大きなはさみです。ハクセンシオマネキはシオマネキに比べると小型ですが、たいへんダイナミックで複雑なダンスを披露してくれます。

ハ クセンシオマネキのダンスの基本型は、大きなはさみを前から横に広げ、外から内へと大きく円を描くように振り上げて降ろすという動きです。それは応援団の三三七拍子に似ています。また、このダンスには応用型があつて、はさみを横に広げたときに、体を上下に揺るようなパターンもあります。その動

きは、横綱の土俵入りのように豪快です。別のパターンとして、はさみを上下する間に左右に素早く移動することがあります。BGMにはマンボやルンバが似合います。BGMにはマンボやルンバが似合います。

チ ゴガニは集団演舞で私たちの目を楽しませてくれます。小さなチゴガニは、両方のはさみを一緒に振り上げてから降ろす動作を繰り返します。一定のリズムで繰り返される白いはさみの上下運動は、やがて周囲のチゴガニに伝染し、まるで「いっち、に。いっち、に」と号令をかけているようにそろってきます。ダンスというよりは、ラジオ体操と言った方がふさわしいかも知れません。

で も、バックに鐘、太鼓、三味線の音を流すと…、そうです。このリズム、この手つきはどう見ても阿波踊りでしょう。

カニたちのウエービング (はさみ振り行動)

カ

ニたちがはさみを一定の型に従って動かす運動はウエービング(waving)と呼ばれています。シオマネキ、ハクセンシオマネキ、チゴガニのほか、コメツキガニやヤマトオサガニもウエービングをします。

コ

メツキガニのウエービングは基本的にはチゴガニとよく似ていますが、テンポが遅く、四対の脚を踏ん張ってはさみを振り上げる格好はあくびをしているように見えます。ヤマトオサガニは人が手の肘を張ったような格好ではさみを上下させます。また、大きなヤマトオサガニのウエービングは油の切れたゼンマイ人形のようにギクシャクしています。



▲ハクセンシオマネキのウエービング



▲ヤマトオサガニのウエービング



で

は、カニたちはどうしてウエービングをするのでしょうか。

理

由その1 雌に対する雄の求愛行動。ハクセンシオマネキの雄は雌が近づくると10cmほどの距離を保ちながら盛んにはさみを振り、雌の注意を引きつけて自分の巣穴へと誘います。

理

由その2 なわばりを守るための威嚇?。チゴガニやハクセンシオマネキは、周囲に雌がないときにもウエービングを行います。このようなウエービングは、なわばりを主張するためのものではないかと考えられています。しかし、ウエービングの本当の意味については、わかっていないことがたくさんあります。



▲コメツキガニのウエービング



▲チゴガニのウエービング



干潟の住宅事情

干 潟にはたくさん種類のカニが暮らしていますが、カニたちはそれぞれの習性に合わせて、上手に干潟をすみ分けています。

シ オマネキはヨシの生えている泥質の土に巣穴をつくります。入り口がこんもりと盛り上がり、火山の噴火口のように見える巣穴もあります。

潮 が引いて干潟が現れると、シオマネキの最初の仕事は巣穴の掃除です。満潮のときに痛んだ巣穴をはさまや脚を使ってきれいに修理します。巣穴の中から泥を運び出したり、おおきなはさみで巣穴の形を整えたり、まるで左官屋さんみたいです。

満 ち潮が近づくと、カニたちは巣穴の中へと戻っていきます。このときに多くのカニが巣穴の入り口に蓋をします。

コ メツキガニの蓋かぶせは、ちよつとせつがちです。片側の脚を巣穴の方に向けて、コンパスで円を描くように回転しながら反対側の脚で砂を集めます。そして、体を巣穴の中に入れるときに脚に抱えた砂の固まりを裏返すようにして蓋をします。本当に一瞬の早業です。

コ メツキガニに比べると、シオマネキの蓋かぶせは丁寧で念入りです。まず、脚を使って、巣穴の周辺の泥を入り口の大きさに合わせて切り出します。次に片側の脚で切り出した泥を抱え、泥を抱えていない方の脚から巣穴に入ります。そして、体が巣穴の中に入る瞬間、泥の固まりをくるりと回転させるようにして蓋をします。最後に、巣穴の内側

から蓋の周辺を修整して、できあがりです。ちよつと見ただけでは、そこに巣穴があったかどうかわからないほど巧みな蓋かぶせで、芸術的な職人芸と言えそうです。



●シオマネキの蓋かぶせ行動



●巣穴から出てくるシオマネキ

●メツキガニの巣穴

干潟をすみ分けるカニたち

吉 野川の河口域には二〇種を超えるカニがすんでいます(酒井ほか一九九七、一九九八)。このカニたちは、河口域の塩分濃度や干潟の底質(干潟をつくる砂泥の質)の違いなどに応じて、河口域をすみ分けています。

吉 野川河口干潟(住吉干潟)では、河川敷グラウンドから下流に進むにつれて、干潟の底質が泥(粘土状)から砂へと変わります。そこで、観察できるカニは、

泥…シオマネキ、ヤマトオサガニ、泥と



●泥+砂質にすむハクセンシオマネキ

砂の混じる場所…チゴガニ、ハクセンシオマネキ、砂…コメツキガニと変わります。

ま た、水面から離れた堤防沿いの石垣にはオオユビアカベンケイ、水際にはヤマトオサガニ、ケフサイソガニ、マメコブシガニがすんでいます。

吉 野川河口干潟の広さ、底質の多様さ、そしてヨシ原や石垣などが、多種多様なカニの生活を支えています。



●泥+砂質にすむチゴガニ



●泥質にすむヤマトオサガニ



●泥質にすむシオマネキ

干潟のカニの仲間たち



オ オオユビアカベンケイ

オオユビアカベンケイは、シオマネキやアシハラガニと同じくらいの大きさで、その名前の通り真つ赤なはさみをもっています。堤防沿いの石垣の隙間や転石の下を隠れ家にしてしています。その身の隠し方やすばしっこい横走りはまるで忍者のようです。吉野川河口では固体数も多く、ごく普通に見かけるカニですが、有明海など限られたところにしか生息していません。



● ヤマトオサガニ

堤

防をヨシ原に沿って少し下流に進むと、干潟の上に水たまりが残った場所が出てきます。その水たまりをよく見ると、水中から潜望鏡のように目が飛び出しています。この目の正体はヤマトオサガニです。扁平で横長の体をしたヤマ

トオサガニのはさみは、床屋さんのはさみのようにスマートです。ヤマトオサガニは、その真つ白なはさみをはしやスプーンのように使って餌を食べます。ヤマトオサガニは水場が近くにないと不安なようです。

● コメツキガニ

ヨ

シ原がとぎれて、干潟の泥が砂地になると、砂とそっくりの色をした小さなカニが登場します。おむすびのような形の甲羅をもつこのカニは、コメツキガニです。コメツキガニは干潟の「団子屋さん」です。干潟一面に広がる無数の砂団子はコメツキガニの作品です。コメツキガニは右に左にといまわり、口に砂を運んでは、栄養分だけをこしとって、残りの砂を吐き出します。吐き出された砂は口元で団子のように丸くなり、最後にはさみで切り落とされます。



● 砂団子を吐き出すコメツキガニ

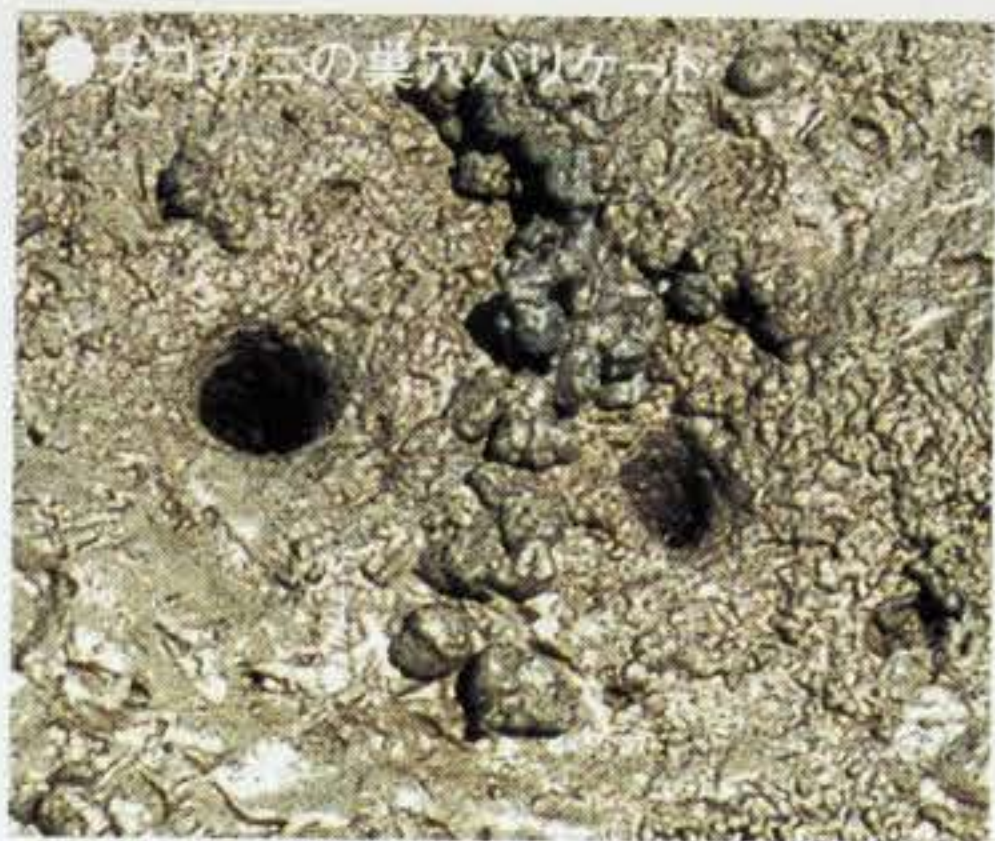




●チゴガニ

シ原の周辺の泥と砂が混じる干潟には、甲羅の幅が1cmに満たないチゴガニが群れています。チゴガニは白いはさみとルリ色の体の色の取り合わせがきれいなカニです。チゴガニは、自分の巣穴の周りになわばりをもっています。もし、自分のなわばりにほかのチゴガニが入

ってきたら、はさみを激しく振って威嚇したり、直接取っ組み合いのけんかを行って侵入者を追い払います。また、チゴガニは自分のなわばりを守るため、お隣さんに「いやがらせ」をします。「いやがらせ」とは、隣のチゴガニの巣穴の横に泥で壁（バリケード）をつくったり、巣穴をふさいだりする行動のことを言います。バリケードはチゴガニが乗り越えられない大きさではないのですが、バリケードや巣穴ふさぎで「いやがらせ」をさががらせをされたチゴガニは、「いやがらせ」をしたチゴガニのなわばりに近づかないようです。



●チゴガニの巣穴バリケード

●ケフサイソガニ

干潟の下流域にある石をめくるとケフサイソガニを観察することが出来ます。上から見ると四角の体は薄く扁平で、石の下の隙間に隠れるのには好都合です。雄の成長したケフサイソガニは、はさみのつけねに房状の毛をつけています。



●アシハラガニ

がちりとした胸板(?)の厚い体。ペンチのような大きなはさみ。挑戦的にも見える目つき。このプロレスラー

のようなカニはアシハラガニです。アシハラガニ(＝ヨシ原)という名前が示すように、干潟のヨシ原の周りでたくさん見かけます。アシハラガニは、その大きなはさみを器用に使うて餌をつまみます。その動きは大きな体と似合わず、たいへん繊細です。



吉野川河口干潟へのメッセージ

伊賀佳子さん

東 京に来て2年。家族で東京港野鳥公園(要入場料)に行った。観察小屋で鳥を覗いた後、干潟に立ち寄った。普段は立入禁止なんだ。狭い所にカニを求めて子供たちが群がっている。でも、我が家の子供たちは浮かない表情。唯一声を上げたのは、引き潮の波打ち際にクラゲを発見した時。触らぬように気を付けながら外へ外へと追い出していった。

ああ、広大な吉野川の干潟がなつかしい! さざめくほどの生命でみなぎっている貴重な吉野川の河口よ、どうかそのままと願わずにいられない。

長澤陽子さん

干潟の音

干 潟の観察会は楽しいが、一人で行くのもいい。潮が引いた岸边にしゃがみ込んで目を閉じると、いろんな音が聞こえる。葦の葉づれの音、ヨシキリの声、プチプチという音。カニの食餌かカニ穴に水が出入りする音なのか・・・「カニたちは元気なんだな。」と思う。そっと目を開けると、足元にシオマネキの大きなハサミがたくさん集まっていたりする。私も自然に溶けたような一瞬。

大久保多加代さん

わ たし、ながぐつ履いて、帽子かぶって、チゴガニが白いはさみを上下して、白いはさみ付けねのほう、きれいな水色が見え隠れする。粹なこととして「オヌシなかなかやるな」と思う。ここは吉野川河口干潟。吉野川198kmの流れのここで、太古の昔からずうっと繰り返してきた潮の満ち引きを感じながら、今、生きる時間を共有するオヌシとわたし。

田島正子さん

吉野川河口干潟の風景

昔 から人は、干潟から多くの海の幸という恵みをもらい生活の糧としていました。残念ながら、今、日本は海と陸の接点である干潟をほとんど失ってしまい、人は海や川から切り離されてしまいました。幸い、吉野川には、のびやかな河口干潟の風景と人と生き物の賑わいが見られます。広大なヨシ原、川を行きかう漁船、青海苔の養殖、シジミ採りで賑わう人々、鳥の群れ、釣り人、カニを追いかける子供達・・・干潟の風景は、ゆるやかな時の流れの中で私達に安らぎを与えてくれます。

● トビハゼ

泥 の上をピョンピョン跳ねて、水から目だけを出して泳ぐこともある、この変な魚はトビハゼです。水陸両用のすごいヤツですが、顔つきはどこかひょうきんです。



● フトヘナタリ
ヨ シの根元や泥の上をよく見ると、1〜2センチメートルの大きさのフトヘナタリがもそもそと動いています。この巻き貝が通った跡は浅い溝になって、前衛芸術のような模様を干潟に描きます。



● ルイスハンミョウ

近 づくくと、ブーンと飛んではちよつと離れた砂の上に着地して、また、近づくくとブーンと飛んでは着地を繰り返す。大きな河口の干潟にしか生息しないルイスハンミョウは、干潟の道先案内人です。





●吉野川河口に進行中の巨大開発プロジェクト

吉野川河口干潟は1996年のブリスベンにおける第6回ラムサール条約締約国会議で「東アジア・オーストラリア地域におけるシギ・チドリ類に関するネットワーク」に日本で最初に登録された国際的にも重要な湿地です。また、環境庁による日本の最重要湿地13カ所の1つに指定されています。今、吉野川河口域には、河口干潟の真上を通る2本の道路橋(①東環状大橋・②四国横断自動車道路)の建設、河口人工島埋め立て(③マリンピア沖洲第二期工事)、そして④第十堰可動堰化などの複数の開発が計画され、河口干潟への影響が心配されています。

《あとがき》

現代において、種や生態系の多様性を保全することは国際的な目標とされています。諫早湾干潟、藤前干潟、三番瀬干潟への注目からもわかるように、湿地や干潟は豊かな生態系を保持することが知られていて、今や世界的にも非常に関心が高いものです。

吉野川河口の干潟に出かけて行って、シオマネキウォッチャーとなって、生物の多様性の意味をほんの少し教えられ、また川と人との関わりの場面も多様であったことに気づかされました。

シオマネキの住みかであり、生き物の宝庫である吉野川河口の干潟は、自然との一体感や、おとなも子どもたちも泥んこになりながら、お互いに人の気持ちを近くで感じることができる素敵な場所です。だけど今、私たちは本当に川や自然と深く関わった生活をしているのでしょうか？

漁師のおじさんの「干潟は餌がわいてくる場所。ほなけん、吉野川も干潟ももう虫の息やけん。今のままこのままの自然がええ

けん残したらええやいうんは、あかん」という言葉が心に残ります。

久しぶりの夕焼けに出会いました。吉野川に広がる茜空です。この雄大さを誰かに知らせたいと思いました。おじさん、おばあさん、両親たち、子どもたち、友人たち。世代を越えて、愛しい人たちと、吉野川を語り合い、自然と人との関わりあいをもう一度見つめ直すことの始まりになることを、シオマネキの向こう側に明るい未来を託して……

吉野川の干潟でお会いしましょう!!

「しおマネキブック」の作成にあたっては、奈良女子大学の和田恵次先生はじめ、さまざまな人たちと出会い、多くのご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

とくしま自然観察の会

発行日：1999年3月31日

著者・編集：渡邊重義・とくしま自然観察の会

干潟を採検する人へのお願い



●立ち入り禁止区域や禁止行為をチェックしてください。

干潟などの沿岸水域の中には漁師さん(漁業権者)が管理している場所があります。そのような場所に立ち入るときには、事前に連絡して許可を受け、禁止行為を知っておきましょう。



●観察のマナーを守りましょう。

干潟のカニや生き物は、意外と環境の変化に弱く、ちょっとしたことで弱ってしまいます。捕まえた生き物は、できるだけ短い時間で観察し、採集した元の場所に戻してあげましょう。また、採集するときに掘った穴や動かした石などは、元の状態に戻してください。



●ゴミはもって帰りましょう。

干潟にはいろいろなものが流れ着きます。その中にはもちろん人の流したゴミも含まれています。干潟にとって不自然なゴミは出さないように、自分の持っていったものは必ず持ち帰って下さい。

●干潟に関するブックリスト

- 秋山章男・松田道生(1974)干潟の生態観察ハンドブック 東洋館出版社
- 阿部正之(1996)海辺の生き物ウォッチング 誠文堂新光社
- 井口利枝子ほか(1997)吉野川河口周辺におけるシオマネキとハクセンシオマネキの分布 徳島県立博物館研究報告 7. 69-79.
- 丘 修三・長野ヒデ子(1997)海をかえして 童心社
- 小野勇一(1995)干潟のカニの自然誌 平凡社
- 木暮正夫(1996)いきかえった谷津ひがた 佼成出版社
- (財)日本自然保護協会(1981)いその自然かんざつ NACS-J
- (財)日本自然保護協会(1984)自然観察ハンドブック 思索社
- (財)日本自然保護協会(1993)干潟の観察会をしよう! NACS-J
- 栗原 康(1980)干潟は生きている 岩波新書
- 酒井恒(1980)蟹(かに) その生態の神秘 講談社
- 酒井勝司ほか(1987)小学校の理科教材としての生物の利用についての考察 - 吉野川河口域に見られる動物の教材化を中心として - Naturalists 1(1) 17-27.
- 酒井勝司ほか(1988)吉野川河口域に見られる動物 Naturalists 1(2) 85-91.
- 佐藤陽一ほか(1992)徳島県吉野川河口から採取されたタビラクチとその分布 徳島県立博物館研究報告2. 43-50
- 鈴木廣志・佐藤正典(1994)淡水産のエビとカニ 西日本新聞社
- 武田正倫(1986)大きなはさみのなぞ 文研出版
- 武田正倫(1983)グリーンブックス41 カニの生態と観察 ニューサイエンス社
- 村岡健作・小田原利光(1995)カニ百科一生態・種類・飼育・標本の作り方・料理 成美堂出版
- 逸見泰久(1994)和白干潟の生きものたち 海鳴社
- 松下竜一(1990)どろんこサブウー谷津干潟を守る戦いー 講談社
- 松下竜一(1981)海を守るたたかい 筑摩書房
- 山下弘文(1989)だれが干潟を守ったか - 有明海に生きる漁民と生物 - 農山漁村文化協会
- 山下弘文(1996)西日本の干潟 - 生命あふれる最後の楽園 - 南方新社
- 山下弘文(1998)諫早湾ムツゴロウ騒動記 南方新社
- 和田恵次(1982)干潟のカニの生活 アニマ114 平凡社
- 和田恵次(1998)チゴガニ類のいやがらせ行動 遺伝 52(5) 46-50.
- 和田恵次ほか(1996)日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状.WWF-Japanサイエンス レポート3. WWF-Japan